

2014年2月20日／浪宏友ビジネス縁起観塾

理想の現実化

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「妙音菩薩品」

1. 妙音菩薩品の概要

- (1) 娑婆世界で説法する釈迦牟尼世尊のもとに、東方の世界から妙音菩薩が訪れ、釈迦牟尼世尊と多宝如来に挨拶します。
- (2) 華徳菩薩が釈迦牟尼世尊に、妙音菩薩について質問します。
- (3) 釈迦牟尼世尊は、妙音菩薩の来歴と功德についてお話し、人々が深い感銘を受けます。
- (4) 目的を果たした妙音菩薩がもとの国へ帰ります。

2. 妙音菩薩の娑婆世界来訪

(1) 妙音菩薩が見える

《薬王菩薩本事品第二十三》の説法を終えられたお釈迦さまは、頭の頂上と眉間の白毫相から大光明（智慧の光）をお放ちになりました。

すると、はるか東方の浄光荘嚴という国に浄華宿王智如来という仏さまがおられ、そのお弟子に妙音というすばらしい大菩薩がおられるのが見えてきました。（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p.204）

(2) 妙音菩薩の願い

その菩薩はその仏さまに、「娑婆世界にいて釈迦牟尼仏を礼拝し、大菩薩たちとも語りあってみたいとぞんじます」ともうしあげます。（同p.204）

(3) 浄華宿王智如来のご注意

すると、その仏さまは「よろしい。いってきなさい。しかし、娑婆世界はこの国にくらべてたいへん汚く、仏さまのおからだも小さいために、あの国の仏・菩薩や国土を軽んずる気持が起こりやすいのですが、それはたいへんなまちがいだから、気をつけなさい」とおさとしになります。浄華宿王智如来のせいの高さは六百八十万由旬もあり、妙音菩薩すら四万二千由旬もあり、身は金色に輝いているのですから、娑婆の仏・菩薩とはくらべものにならないわけです。（同p.204～205）

(4) 妙音菩薩の来訪

ところが、その美しくも偉大なすがたの妙音菩薩が靈鷲山に到着するや、お釈迦さまのみ前にひれ伏して礼拝し、ていねいに挨拶もうしあげたのです。（同p.205）

(5) 多宝如来を拝する

そして、「多宝如来をも拝したいのですが、世尊のお力でお目にかからせていただけませんか」とお願いいたします。

お釈迦さまがそのことを多宝如来に伝えますと、たちまち「よくぞ釈迦牟尼仏を供養にきました」という多宝如来のおほめのことばがひびいてきました。(同p. 205)

註：多宝如来は真理そのものです。釈迦牟尼仏は真理を説き、真理に動きを与える人です。私たちは、釈迦牟尼仏（真理を説く人）を通さなければ、多宝如来（真理そのもの）に出会うことができないのです。

(6) 妙音菩薩の功德

このありさまに不思議の感をおぼえた華徳菩薩が、お釈迦さまにわけをおたずねしますと、お釈迦さまは、妙音菩薩が過去世において雲雷音王仏という仏さまに、一万二千歳のあいだ音楽を奏し、八万四千の七宝の器をささげて供養もうしあげた功德によって、このような神力を得たのだとお話しになります。(同p. 205～206)

(7) 妙音菩薩の变化身

しかも、妙音菩薩はいまここにおられるおひとりだけでなく、いろいろな身となって所々方々にあらわれ、衆生のために教えを説かれるのだとおおせられました。(同p. 206)

註：【参考】“妙音菩薩の变化身”参照。

(8) 妙音菩薩の帰還

一同がそのお話をうかがって、ひじょうに深い感銘を受けますと、妙音菩薩も娑婆にきた目的を果たしましたので、浄光莊嚴国へ飛び帰られたのでした。(同p. 206)

3. 理想の現実化

(1) 理想

浄光莊嚴国というのは〈理想の世界〉です。理想というものは心の中に創りあげたすがたですから、その国土はあまねく光り輝き、そのの仏・菩薩はひじょうに巨大な、しかもこの世では見られぬような美しい身をもっておられるのです。(同p. 206)

(2) 現実

現実の世界（娑婆）というものは、理想の世界にくらべると、国土はたいへん汚く、そのの仏・菩薩もひじょうに小さく見えます。(同p. 206)

(3) 妙音菩薩が釈尊を拝む

ところが、浄華宿王智如来のおさとしのとおり、妙音菩薩は娑婆世界のお釈迦さまを心から崇め、拝みました。ということはつまり、理想世界を現実にこの娑婆に建設しようと努力なさるお釈迦さまは、理想そのものより尊いお方であるということにほかなりません。(同p. 207)

(4) 理想を現実化する努力こそ

理想は、たんに心のなかにえがくだけでは、まだ一種の夢にすぎません。それを現実化してこそ、あるいは現実化の努力をしてこそ、その価値は生きてくるのです。(同p.207)

4. 妙法を大衆に伝える

(1) 妙音菩薩による供養

過去世の妙音菩薩は、ながいあいだ雲雷音王仏を供養しました。

① 音楽を奏して供養する

音楽を奏したと言うのは、〈妙法〉を人々の胸にひびかせたことの象徴です。(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p.207)

② 八万四千の七宝の器をささげる

八万四千の七宝の器をささげたというのは、仏さまの無数の教えを世の大衆に伝えたということです。(同p.207~208)

(2) 最大の供養

〈仏さまの説かれた妙法をひろく世の大衆に伝える〉ことこそ、仏さまにたいする最大の供養であることを、お釈迦さまはここに示されているのです。(同p.208)

5. われらも妙音菩薩

それ(〈仏さまの説かれた妙法をひろく世の大衆に伝える〉ことこそ、仏さまにたいする最大の供養であること)がわかれば、妙音菩薩がいろいろな身となり、所々方々にあらわれて法を説かれるということの意味も、おのずから明らかになってくるでしょう。われわれの周囲にも、無数の妙音菩薩がおられるのです。いや、われわれ自身も、法華経の教えにもとづいて人のために法を説けば、まちがいなく妙音菩薩の化身だということができるのです。こういう自覚をもつかぎり、どうしても正法流布のために勇猛精進せざるをえなくなるはずです。(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p.208)

6. 理想を心のなかにえがく

「理想を心のなかにえがく」のは、重要なことです。

真理に生きる人々のすがたを心のなかにえがいて手本とし、真理に合った生き方をしている自分のすがたを心のなかにえがいて目標とし、そのすがたに向かって努力することの大切さが、仏教では、さまざまな形で説かれています。

7. 理想のすがたを見失う

理想のすがたを見失った人々のことが、経文に説かれています。この人々は、理想に向かうことができません。

(1) 幸福を想うことができない

経文の現代語訳「罪の行為をつづけるために、幸福を失い、また幸福を想うことさえもなくなり、まちがった考えのなかにすっかり住みついてしまって、善というものの見本さえ知ることができません。こうして、仏さまに教化されることもなく、悪い境界に落ちていくのであります」

(庭野日敬著『新釈法華三部経 4』p. 266～267)

(2) 悪道が我が家

経文の現代語訳「これらの人びとは、たとえ地獄にいても、まるで庭園や高樓で遊んでいるような気持ちであり、その他の修羅・餓鬼・畜生などの悪道にいても、まるで自分の家にいるような気でいるのです。」(庭野日敬著『新釈法華三部経 3』p. 256)

解説「つまり智慧がなく、煩惱にとらわれているために、現在の自分が、どういう状況にいるか正しく判断できず、地獄のような苦の世界が自分にとっていちばんあっていて、楽しい世界だと思っているのです。」(同p. 257)

8. 法華経の理想

妙法蓮華経従地涌出品第十五のなかに「世間の法の染まざること 蓮華の水に在るが如し」という一句があります。これこそ、「法華経」に教えられている人間の理想的なありかたです。世間から離れるのではない、世間にいながら美しく清らかに生活するのです。そして、社会のすべてをこのように清らかに、美しくしたいというのが「法華経」の理想なのです。「妙法蓮華経」という名前は、そこから出ているのです。(庭野日敬著『法華経の新しい解釈』p. 303)

9. 法華経の理想の現実化

法華経の理想の現実化のために説かれた教えが、五種法師の修業です。法師品に、五種法師が次のように説かれています。

第一に、教えを受持していく決意を念々に新たにすること(受持)

第二に、教えをくりかえして学ぶこと(読)

第三に、それを誦んじることができるほど心に植え付けること(誦)

第四に、ひとのために解説してあげること(解説)

第五に、その教えが世にひろまるようにあらゆる努力をすること(書写)

(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 102)

【参考】

びやくごうそう
白毫相

仏陀の眉間には白いうず毛があり、光明を放つと言われています。これが白毫相です。仏陀の智慧の象徴です。

しゃぼ
娑婆

sahā(サハー)の音写。私たちが住む世界のこと。忍土などと漢訳します。

私たちが住む世界は、人々は内面に数々の煩惱を持ち、外界にはさまざまな災害などが満ちているので、苦悩を耐え忍ばなければ生きていけないから娑婆(忍土)と言われるとされています。

ゆじゆん
由旬

インドの距離の単位“yojana(ヨージャナ)”の音写。古来より様々な定義がなされています。

「人間の背丈の八千倍」「帝王の行軍の一日分」「牛の鳴き声が聞こえる最も遠い距離の八倍」など。

へんげしん
妙音菩薩の变化身

ぼんでんのう たいしゃくてん じざいてん だいじざいてん
梵天王(創造神ブラフマー)、帝釈天(空界の王インドラ)、自在天(破壊の神シヴァ神の異称)、大自在天(シヴァ神の異称)、

てんだいしょうぐん びしゃもんでんのう
天大将軍(天の軍隊の大將)、毘沙門天王(四天王の一人で多聞天ともいう、四天王は持国天・增長天・広目天・多聞天)、

てんりんじょうおう もろもろ しょうおう ちやうじゃ こじ さいかん ぼらもん
転輪聖王(徳の高い王、世界の主権者)、諸々の小王、長者、居士(一家の主人)、宰官(官吏)、婆羅門(バラモン教の修行者)、

びく びくに うぼそく うぼい
比丘(男性の出家修行者)、比丘尼(女性の出家修行者)、優婆塞(男性の在家修行者)、優婆夷(女性の在家修行者)、

ちやうじゃ こじ ぶによ さいかん ぶによ ぼらもん ぶによ どうなん どうによ
長者・居士の婦女、宰官の婦女、婆羅門の婦女、童男・童女、

てん りゆう やしゃ けんだっぼ あしゆら かるら
天、龍、夜叉(人を悩ます鬼類)、乾闥婆(音楽を奏する半神)、阿修羅(神々に敵対する悪鬼)、迦楼羅(半鳥半人の姿をした鳥の王)、

きんなら まごらが にん ひにん
緊那羅(馬頭人身でよく歌う半神)、摩睺羅伽(蛇頭人身の鬼類)、人、非人、

ごぐう
王の後宮においては変じて女身となって、

しょうもん びやくし ぶつ ぼさつ ぶつ
声聞、辟支仏、菩薩、仏、

減度を以て得度すべき者には減度を示現す、

(人・非人を除いた三十四の姿を、妙音菩薩の三十四身と言います。)